

## INTERVIEW

京都大学 教授  
福島県立医科大学 副学長  
福原俊一先生



# 臨床研究は地域医療を 元気にする。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

## 医療のリアルワールドを体験して

山田隆司(聞き手) 今日は京都大学に福原俊一先生をお訪ねしました。福原先生には6月25日に行われる地域医療振興協会主催の「第11回 へき地・地域医療学会」のメインシンポジウムのシンポジストとして登壇いただくことになっています。また先日は当協会の研修医のセミナーで臨床研究のデザインについて講演していただき、とても参考になるお話を伺うことができました。今日はまず先生の経歴を簡単に紹介していただき、それからなぜ臨床研究の道に進まれたのかといったことを教えていただければと思います。

福原俊一 私は北海道大学医学部卒業ですが、不真面目な学生だったので、大学の外に出て厳しい修練を受けなければ患者さんに迷惑かけてしま

うという思いが5回生になって沸々と湧いてきて、いろいろな病院を見て回りました。虎の門病院や聖路加国際病院等を含めさまざまな病院を見に行き、たどり着いたのが沖縄県立中部病院でした。医師になるというのはこういうことだったのか、と大きな衝撃を受けました。2週間いましたが、救急室に毎日行って、リアルワールドの最前線に触れました。若手の指導医が非常に熱心で、本当に良い教育が実践されていることに感銘を受けました。ここで研修を受けようと思ったのですが、いろいろ伺ってみますと、優秀な指導医の多くがアメリカで研修を受けていたことが分かりました。それなら自分もアメリカで研修を受けようと思い、最初は「予備校」として、横須賀米海軍病院でインターン

をしました。とても素晴らしい体験でしたね。小児科、産婦人科、外科、内科、救急室を回り、学生とは違って見学者ではなく主治医として患者さんに対し責任をもって診させてくれました。指導医の多くが30歳代前半の若い医師でしたが、圧倒的な知識と経験を持ち、教育熱心で、われわれを導いてくださいました。ますますアメリカに行きたくなって、その翌年にカリフォ

ルニア大学のサンフランシスコ校へ行き、内科の研修を3年間受けました。

これはとてもつらい経験でしたね。同僚が話す英語のスピードが横須賀の時の2倍くらい速く感じて、特にディスカッションが殆ど分かりませんでした。そのような経験を3年間積んで、帰国後に現在の国立病院機構東京医療センターで7～8年循環器内科に従事しました。

## 再びアメリカの臨床研究を学ぶ

**福原** そのうちに、国立東京医療センターに総合診療科を立ち上げようということになって、私が立ち上げに関わったのですが大失敗でした。多くの大学病院で失敗したようにサブスペシャリティ中心の病院では、患者さんは専門科の診療を望んで来ているわけで、総合診療科はミスマッチングなのですね。また専門医からも歓迎されませんでした。

なぜ市民権を得られないかということ、一番の理由は大きな総合病院では、患者にも専門医にも、ニーズが認識されていないからです。地域の100～300床位の病院、サブスペシャリストがそろってないような病院でこそ、総合診療医は歓迎されますね。それに私は気付いていませんでした。

2つ目は、患者はもちろんですが、専門医への配慮が未熟な私には欠落していました。日本で最も成功しているといってよい飯塚病院の総合診療科プログラムの責任者を長年されてきた井村 洋先生のお話を伺う機会がありました。彼は、総合診療科を任されて、「専門医こそが、総合診療科のお客様だ」という類いまれな逆転の発想で進められたとのことで、なるほど、と得心しました。

3つ目に私が痛感したことは、当時日本の総合診療科には学術基盤がなかったということでした。学術基盤がないと日本では市民権を得られないのです。最近総合診療科は、19番目の基本領域として認められたものの、苦戦しています。いろいろな人に総合診療の必要性や意義を話しても、聞かれるのは、「学問はあるのか」です。学問が全てではないけれど、日本の医学界というのはそうやって成り立っていますから、それにも応えなければいけない。また若手医師も、活動でさらに成長し、元気になるでしょう。総合診療における学術研究は、「研究のための研究」でなく、「医療を変える研究」であるはず。事実、臨床研究に関わることが医師の臨床能力を改善するのでは、という仮説をもっています。

4番目は総合診療だけを10年もやっていると同壁にぶつかります。それはサブスペシャリティも全て同じです。そこでやらなければいけないのは、医師の探求心を満たしてあげることだと思います。医学部に入ってくるような優れた人たちは、常に学び、進歩したいと思っているわけです。ルーティーンの診療を十年一日のごとく繰り返していると、僥倖な言い方ですが、「飽き」ます。それは悪い意味の飽きではなくて、